



Title	初級日本語読解課題作成に関する一考察：中級へのつながりを意識した課題作成における困難点
Author(s)	下村, 朱有美; 谷口, 萌子
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 211-223
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91271
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

初級日本語読解課題作成に関する一考察

—中級へのつながりを意識した課題作成における困難点—

下村 朱有美・谷口 萌子

1. はじめに

日本語学習の初級段階を終え、中級へと進んでから伸び悩みに直面する、「中級の壁」の存在が指摘されている（山本 2019）。その一因として、中級に入ってから、急激に「読む」量が増えるという点が考えられる。初級段階で4技能を育成することがねらいとされている総合教科書の読解練習は量も形式も限定的であり、教材の中で主要な技能として読解が扱われることが少ないのに対し、中級以降は「本文」等として扱う文章内で提示される表現が文法や語彙として学ばれていくという形式へと移行することが多くなり、「本文」の長さも長くなっていく。中級移行後の読む量の多さに圧倒されると、学習継続の意欲が低下する懸念も生じる。さらに、初級者向けの読解教材では日本での生活に根差したものや、添えられている絵や図が内容理解の手がかりになるものが多く取り上げられるが、中級以降は専門的な内容や細やかな表現を理解する形式が扱われる傾向が見られる。このような初級から中級へと移行した際に学習内容・量の変化によって生じる「中級の壁」による学習の行き詰まりを防ぐために、初級から中級へのブリッジ（橋渡し）教材も開発されてきているものの、豊富な選択肢があるとは言い難い。読解のスキルを向上するために限られた素材を繰り返し練習に用いることで、学習者が読解のスキルではなく内容や設問を覚えてしまい、読解スキルを活用せずにタスクを達成する可能性もあり、より多くの多様な課題を扱ったり、読むスキルの評価に用いたりするには、教育現場でのオリジナル課題の作成にあたる必要性もあるだろう。しかし、読解課題作成においては、トピックの選出や分量の調整、使用表現の選出等に関する検討の余地があると考えられる。

そこで本稿では、初級終了程度の日本語学習者を対象とした読解課題作成を行う上での困難点を整理し、教育現場で独自の初級日本語読解課題を作成する上で考慮すべき項目の提示を試みる。本稿は日本語教育現場における読解課題作成の基礎研究として位置づけ、今後の読解課題開発の研究につなげることを目的とする。

2. 先行研究

まず、困難点の検討に先立ち、読解課題作成に関する先行研究を概観する。館岡（2012）では、日本語学習における「読み」について、「学習の読み」と「現実の読み」を提示しており、「学習の読み」は主に初級段階で既習の文型や語彙の定着を確認するものとして提示される物が多く、主としてボトムアップ的な知識を活用した「テキストの学習」になっていると述べ、学習者の読解行動は初級から中級、上級へと進むにつれ、「学習の読み」から次第に「現実の読み」に近づいていくことを示している。「現実の読み」とは、自分のもっているさまざまな知識や推測能力等を活用して、自分なりの読みができるようになっているような、日本語母語話者が現実の生活の中で日本語で行っている読みのことで、読解の学習とは、「学習の読み」から「現実の読み」へと移っていく過程であるとしている。

さらに、同、館岡（2012）では、読解教材作成における生教材の教材化について述べられており、はじめから教材として使われることを目的に書かれた文章と生教材の文章の違いとして、文章を書いたときの目的が異なる点を指摘している。生教材の特徴として、あるメッセージを伝えるために書かれている点、及び、言語面での特別なコントロールがされていない点を挙げ、生教材では「生きている社会の生きていることばに触れることができ、読むことを通して日本社会に参加することができる」と述べている。一方で「学習者のその時点での日本語能力や背景知識では、理解が難しい場合」も生じうるとしている。本稿では学習者の読解行動にあわせ、「学習の読み」から「現実の読み」へと少しずつ変化させていくことに留意し、読解課題を作成する観点から考察を加える。なお、生教材の使用については、初級においては限られた情報を理解することは可能であっ

ても、全体に渡る理解が難しい場合が多いことが予想される。さらに、公開を前提として作成する場合は著作権上の配慮も必要になることから、主に「はじめから教材として使われることを目的」にしたテキストの作成、もしくは既存のテキストを初級者向けにリライトしたテキストについて検討する。

「読む」活動の一形態としては「多読」もあり、多様なレベルを対象とした多読素材も公開・出版されている。栗野他(2012)では多読を取り入れる際、「やさしいレベルから読む」、「辞書を引かないで読む」、「わからないところは飛ばして読む」等のルールを提示しており、これらのルールに基づいて読むことが多読の特徴の一つであると言える。また、多読用の読みものを作成する際、日本語能力試験の語彙と文法の範囲を参考に昔話をリライトする作業を行い、「題材は話の展開がはっきりしているものにする」、「挿絵を多く入れる」等、学習者の読みやすさに考慮した方針を立てたと述べている。

その他、東(2016)では、入門・初級レベルのオリジナルの「本」作成について手順が示され、学習者に身近なテーマを扱うことが提案されている。さらに、和栗・田中(2021)ではフィールドワーク等でリソース収集を行い、多読ブックを作成した事例が紹介され、作田・古川(2020)では日本語学習者が日本語母語話者の学生とともに多読の読み物づくりを行ったことが報告されている。本稿で作成を検討するテキストは多読用に限定したものではないが、先行研究で読みやすさに考慮した作成方針が立てられ、テキストの作成を目的としたリソース収集が行われている点は、本稿でトピックの選定等を検討する際に参考になると思われる。

3. 初級読解課題作成における検討事項

課題作成の困難点の整理に移る前に、本節では課題作成が必要となる場面について整理する。特に初級の学習者を対象とした読解課題作成が求められる場面を明らかにし、作成する読解課題の分量や形式、トピック等について検討する。

なお、「初級」、及び「中級」のレベル設定について、本稿では日本語能力試験において、「基本的な日本語をある程度理解することができる」とされている N5、及び「基本的な日本語を理解することができる」とされている N4 を初級と

して扱い、「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」N3 を中級レベルとして検討を進める（国際交流基金他、2012）。

3.1. 中級への橋渡しとしての読解課題

上記で「読む」量が増加していくことを指摘したが、2010 年に改定された日本語能力試験の初級から中級に該当する N5 から N3 のレベルの読解問題では、以下の基準で問題が設定されている。

表 1：「読解」大問のねらい（国際交流基金他（2012）より抜粋）

N5	内容理解 (短文)	学習・生活・仕事に関連した話題・場面の、やさしく書き下ろした 80 字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
	内容理解 (中文)	日常的な話題・場面を題材にやさしく書き下ろした 250 字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
	情報検索	案内やお知らせなど書き下ろした 250 字程度の情報素材の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
N4	内容理解 (短文)	学習・生活・仕事に関連した話題・場面の、やさしく書き下ろした 100 ～ 200 字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
	内容理解 (中文)	日常的な話題・場面を題材にやさしく書き下ろした 450 字程度のテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
	情報検索	案内やお知らせなど書き下ろした 400 字程度の情報素材の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う
N3	内容理解 (短文)	生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など 150 ～ 200 字程度の書き下ろしのテキストを読んで、内容が理解できるかを問う
	内容理解 (中文)	書き下ろした解説、エッセイなど 350 字程度のテキストを読んで、キーワードや因果関係などが理解できるかを問う
	内容理解 (長文)	解説、エッセイ、手紙など 550 字程度のテキストを読んで、概要や論理の展開などが理解できるかを問う
	情報検索	広告、パンフレットなどの書き下ろした情報素材（600 字程度）の中から必要な情報を探し出すことができるかを問う

本稿では紙幅の都合により省略するが、N2、N1になると「書き下ろした」という表記はなくなり、さらに、複数のテキストを読み比べて、比較・統合しながら理解できるかを問う「統合理解」の問題も設けられる。ここからも、初級からレベルが上がるにつれ、読解の課題として提示されるテキストが長くなり、理解が求められる内容がより複雑になっていることがわかる。

テキストの長さについては、表1では「短文」については、N5で80字程度、N4で100～200字程度、「中文」ではN5で250字程度、N4で450字程度となっているのに対し、N3では「短文」が150～200字程度、「中文」が350字程度、さらに「長文」では550字程度とされている。

また、トピックや形式については、N4、N5では日常的な話題や場面が扱われているのに対し、N3ではさらに説明文や指示文、解説、エッセイ等が用いられている。読解課題のトピックを検討する際、N3で扱われているような内容への慣れや導入を意識したものになることが望ましいのではないだろうか。

3.2. アカデミック・ジャパニーズの導入

特に日本での進学を志す日本語学習者については、大学等の教育機関で必要となる日本語としてアカデミック・ジャパニーズの導入が求められる。日本語教育学会（2005）では「大学や研究機関において必要とされる日本語（アカデミック・ジャパニーズ）」は、実際の学生生活を日常生活と大学での学術研究の2つの場面と考えた場合、後者に該当する学習スキルは学術研究活動に必要なスキルであり、学内での諸事務手続き能力、コンピュータ・リテラシーをはじめとする、講義を聴き、演習で発表し、実験したりする際に必要なスキル、さらにレポートや論文作成、発表、調査研究にかかわらず研究活動スキル等であるとしている。また、このアカデミック・ジャパニーズの語彙の特徴として、カタカナ語、和製英語、省略語が多い傾向にあることを指摘している。

さらに「日本の大学等での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）を測定する」（日本学生支援機構、2022）としている日本留学試験の日本語科目では、読解、聴解、聴読解の領域の問題を通し、言語として明確に表現されていることをそのまま理解することができるかを問う「直接的理解能力」、

文章や談話で表現されている情報の関係を理解することができるかを問う「関係理解能力」、理解した情報を活用して論理的に妥当な解釈が導けるかを問う「情報活用能力」について、読解においては「説明文」、「論説文」、「(大学等での勉学・生活にかかわる) 実務的・実用的な文書／文章」等を用いた問題を設定している。

館岡（2012）の「現実の読み」と照らし合わせると、アカデミック・ジャパニーズにおける「現実の読み」は説明文や論説文を扱ったものであると考えられ、初級終了程度の学習者を対象とした読解課題の内容としてこれらの形式やトピックを段階的に取り入れていくことが提案できる。さらに、読解問題として課題を用いる場合、「直接理解能力」、「関係理解能力」、「情報活用能力」を問う設問を設定することが考えられるが、以下に述べる読解課題作成にあたって、設問を意識したものになることが望ましいと思われる。

3.3. 試験の課題としての活用

初級から中級へと日本語の学習を継続する上では、初級の終了時に既習の語彙・文法の確認に加え、読解の面でも学習者がまとまりのある内容をどの程度理解できているか、3.2. で示した「能力」等を把握しておくことで、学習者の抱える課題を明らかにすることが可能であると考えられる。しかし、このような目的で読解試験を実施したとしても、1節で指摘したように授業内で扱われたテキストを試験課題として用いると、学習者がテキストの内容を覚えており、内容に関する記憶を頼りに解答を導き出してしまう可能性もある。そのため、学習者が目にしたことのない読解課題の使用が望ましいと考えられるが、公開・出版されているものから学習者のレベルや使用目的に合致した素材を準備することが困難なこともある。また、特に長文の読解に不慣れな学習者を対象として使用する際は、学習者と関連があり、学習者自身がつながりを感じられるトピックを使用し、段階的に中級に適した内容や形式を導入していくことで読むことに慣れ、読解能力の向上が期待できるが、そのような読解課題の準備には困難が伴うケースも考えられる。

4. 初級読解課題作成における困難点

以上に見てきた検討事項を踏まえ、本節では初級レベルの読解課題作成を行う上での困難点を整理する。ただし、初級レベルの読解課題の作成といっても、それだけでは検討事項が非常に広範にわたり、全てを整理することは困難である。そのため、考察に先立ち、本稿で想定する教材の目的・文量を設定しておく。

初級レベルの読解と中級レベル以降の読解に期待されることの違いとして、2節で挙げた舘岡（2012）が述べているように「学習の読み」と「現実の読み」という目的の違いもあれば、3節で述べたように文量も大きな違いの一つと言える。文量が比較的少なく「学習の読み」のために作成されることの多い初級読解から、文量が比較的多く「現実の読み」が目的とされることの多い中級レベル以降への橋渡し教材として、中間の段階としてどのようなものがあれば学習者の読解能力を中級レベルにつなげることができるのだろうか。いくつかのパターンが考えられるが、長文で構成された「学習の読み」を目的とするものや、比較的短文の「現実の読み」といったように、初級レベルと中級レベルのどちらの要素も併せ持った課題を作成し、少なくとも、目的の異なるもの、文量の異なるものの両面から学習者が徐々に慣れるように工夫を施す必要があると考える。

文量のギャップに関しては、徐々に文量を増やし、慣れるよう促すほかないが、目的の異なるものに慣れることを意識した場合、つまり「現実の読み」を意識した場合、いきなり生教材に触れることに抵抗を感じる学習者も少なくないだろう。また、先にも述べたように、生教材の使用には、常に著作権上の問題が伴う。そのため、初級終了程度対象でありながら、「現実の読み」を意識した場合には、既存のテキストを初級者向けにリライトする、あるいは独自に読解課題を作成することが求められる。本稿では、このように独自に読解課題を作成する際に、どのような点に配慮が必要かについて検討してみたい。

文量に関しては、3節でも述べたように、本稿では、日本語能力試験のN4、N5を初級レベル相当、N3を中級レベル相当とする。N4では短文読解であれば100～200字程度、N3の短文読解は150～200字程度であるため、本稿でも200字程度の短文読解課題の作成を想定した。

4.1. トピックの選定

初級レベルの読解教材は、日記の形式で書かれるものが多く、その内容としては、公共交通機関や会社・学校での出来事、近隣住民・ホストファミリーとの出来事、日本語に関する勘違い、日本文化・日本事情等、比較的学習者が身近に感じられるトピックが取り上げられており、扱われるトピックは限定的であると言える。対して、中級レベル以降になると、説明文・論説文等、学習者とは比較的關係の薄いテーマや、抽象的で高度な内容が様々取り上げられ、扱われるトピックは非常に広範になっていく。この大きなギャップを埋めていくために、初級終了程度の学習者向けにどのようなトピックを提供するかは、非常に重要なポイントとなるだろう。中級レベルへの橋渡しということを考えると、初級レベルでは扱われることが少なく、中級以降で頻繁に扱われる説明文・論説文に近い書き方の問題作成を試みる必要があると考える。

では、どのようなトピックの説明文にするのが初級終了程度の学習者にとって適切なのだろうか。当初、筆者は日本語母語話者の子ども向けの科学書、新聞のコラム、ニュース番組等からトピックの抽出を試みた。これらのリソースはトピックのヒントになる場合もあるが、膨大な時間を要する上に、内容と対象レベルがあまりにかけ離れているものも多く、この場合、リライトすることも難しくなる。また、2節で取り上げた先行研究ではフィールドワークやプロジェクトワークの一環でトピック収集を行っていることから、読解課題の作成においてトピックの収集や選定が困難点の一つであると言える。

さらに、トピックを選定する際には、初級レベルの語彙をベースに考えることが一つの方法になり得るだろう。例えば、「ポスト」「めがね」「ホテル」「かばん」といった、どのような総合教科書であっても、初級終了までに必ず導入されているものである。トピック自体が初級レベルになるため、初級終了程度の学習者にとって読みやすくなる。ただし、このような語彙そのものの説明文にすると、辞書のような概念の説明になり、かえって読解の負荷が重くなるため、「ポスト」であれば、実際にある有名なポスト、一般的なものとは異なる珍しいポスト等、かなり具体的に上げる必要があるだろう。

以上のように、初級レベルの語彙をもとにトピックを決定することは一つの方

法であるが、トピックが初級までに導入されている語彙でなくても、説明文として作成することが可能な場合もある。初級終了までに学習される表現で書き換えができる、あるいは平易な表現で説明を加えられる場合である。例えば、トピックを「漁師」としたい場合、「漁師」を使用せずに「魚をとる仕事をしている人」のように書き換える、あるいは、トピックを「美容室」としたい場合、文中で「髪を切るお店」という説明を加えるといったものである。

ただし、どのような語彙であっても書き換えや説明の加筆が可能なわけではなく、「寿司」「爪」等、説明を加えようとしても、あまりに冗長になるもの、複雑になるものは扱うことが難しい。説明文として作成する場合には、このようなトピックは初級終了程度の読解教材として相応しくない可能性がある。

その他、トピックとしてどこまでリアリティを追求するかについても、検討が必要であると考えられる。

4.2. 使用語彙・表現

読解課題のトピックを選定する際には、それと同時に、そのトピックのキーワード、つまり文章全体の理解に必須となる表現に関しても考慮する必要がある。キーワードに、初級終了までに学習されていない語彙・表現がある場合、そのトピックが初級終了程度の学習者に向けた読解教材としては適していない可能性があるためである。

初級終了程度の学習者に難しい語彙・表現であっても、それがそのレベルの学習者が理解できるような易しい表現に書き換えが可能であれば問題はないだろう。特に、文型については、易しいレベルに書き換えが可能なものが多い。それに対し、名詞は、書き換え可能なものが比較的少ないと言えるだろう。前節で例に出したように、「漁師」を使用したい場合、「漁師」という言葉そのものは初級レベルでは学習される可能性は低いいため、「魚をとる仕事をしている人」のように簡単に書き換えることが可能なものもある。それでも、文型と比較すれば、書き換えが難しいものが多い。初級終了程度の学習者には難しい語彙・表現であり、かつ書き換えが難しく、どうしても使用を避けられないものである場合には、そのトピックが初級終了程度向けの読解課題として適していない可能性がある。

る。そのため、トピックを選定して作問する準備として、使用する必要のある語彙・表現が学習者のレベルと比較して、大きく開いていないかを確認する必要があるだろう。

また、どのような語彙や表現が初級終了程度なのか、初中級なのかといったレベルの判定についても考慮する必要がある。2010年の日本語能力試験の改定前はレベルごとに出題語彙・表現が設定されており、教育機関でもそれに順じて扱う語彙を選定することがあったが、現行の日本語能力試験ではレベルごとの出題基準は公開されていない。また、語彙・表現のレベルに加え、語彙・表現によっては学習者の国や地域によってなじみのないものである可能性があることに留意する必要がある。例えば教育に関し、学校が何年制かというような、国や地域によって大きく異なる文化や制度の違いにも注意することが求められるだろう。

上記に加え、読解課題内で使用する語彙・表現については、既習のものに限定するのか、未習の語彙や表現も用いて推測を促すのかについても読解課題の使用目的によって検討しなければならない。このように、読解課題で使用する語彙・表現については慎重な検討が必要であると言える。

4.3. 学習者の既有知識への配慮

館岡（2012）でも「現実の読み」とは、「自分のもっているさまざまな知識や推測能力などを活用」することであると述べられており、読解課題作成に際しても学習者への既有知識の配慮が求められる。例えば、何らかの事実について書かれている説明文を扱う場合、その事実について学習者が知っていればテキストの内容を理解しなくても読解のタスクを達成できる可能性が高まる。しかし、トピックを説明文以外に限定すると、日記のようなトピックの使用に偏ってしまい、中級のより多様なトピックの提供やアカデミック・ジャパニーズの導入といった目的の達成が困難になる。また、説明文についてはどのようなトピックであれ、学習者の既有知識によって読解タスクの達成に影響が出ることは避けられない。読み手がおそらく知らないだろうと想定し、日本独自の文化、マニアックなものをトピックに設定したとしても、読み手の個人的経験、趣味から知っている可能性は十分に考えられる。読み手が知らないような情報といっても、中級レ

ベル以降の説明文と比較して、初級終了程度向けの場合、あまりに難しいトピック・内容にすることも困難であり、読み手が知っている情報である可能性はより高くなるだろう。

初級終了程度の説明文の使用にあたっては、日記形式の文章と説明文とを混合させるような形式にしたり、学習者が知っている可能性の低いトピックについての説明文を扱うといったことで対応が可能であると考えられる。書き手の視点・心情を文章に含めることで、どのような情報を持った読み手であっても、既有知識だけでは完全には理解できない文章にすることができる。読解のスキルを活用せずにタスクを達成することを可能な限り避け、読解のスキルを向上させることが期待できる。橋渡しのための教材という観点からも、初級レベルの読解教材によく見られる日記形式の書き方と、中級レベルの読解教材によく見られる説明文を合わせることで、中級レベルで扱われる説明文への抵抗をより少なくし、徐々に慣れていくことを可能にするのではないだろうか。

また、4.2. では学習者の背景に配慮した語彙・表現の使用について指摘したが、トピックについても同様に、読解課題の対象とする学習者によって留意する必要がある。

テキストがあるメッセージを伝えるために書かれ、読まれるものであるという性質上、学習者の既有知識に完全に対応することは難しいものの、読解課題が学習者の動機づけや評価に影響する場合、特に慎重に検討する必要があると考えられる。

5. 今後の課題

本稿では、初級終了程度の日本語学習者を対象とした読解課題の作成における困難点について、「トピックの選定」、「使用語彙・表現」、及び「学習者の既有知識への配慮」の面から述べ、対応案を提示した。これらの困難点は、読解課題を作成する際に特に留意する必要がある点であると言えるが、作成者の日本語教育経験の有無によっては語彙・文法の選出についてもさらなる留意が必要であると思われる。今後、作成される読解課題が類似した構成のものに偏らないよう、より多様な作成手法について検討が必要であるだろう。また、AI を活用したトピッ

クの収集や文章作成を試みるとともに、対象となる学習者の多様性に配慮した課題の作成について検討を進めたい。また、読解課題の試験利用についても今後の検討の課題とできればと思う。

＜参考文献＞

- 東健太郎（2016）「日本語教育通信 授業のヒント 入門・初級レベルのオリジナルの「本」を作ろう」
<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/hint/201601.html>（2022/12/20 最終確認）
- 栗野真紀子、川本かず子、松田緑（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク
- 国際交流基金、日本国際教育支援協会（2012）『日本語能力試験 公式問題集 N1』凡人社
- 作田奈苗、古川敦子（2020）「留学生と日本語教員養成課程の学生との協働による多読読み物づくり」『日本語教育方法研究会誌』26(2)、22-23
- 館岡洋子（2012）『日本語教育叢書つくる 読解教材を作る』スリーエーネットワーク
- 日本学生支援機構（2022）『2022 年度 日本留学試験（第 1 回）試験問題』凡人社
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 山本忠行（2019）「言語による価値創造を目指して (4)― 中級日本語教育の教材と指導法をめぐって ―」『創価大学通信教育部論集』22、16-36
- 和栗夏海、田中哲哉（2021）「多様な研修における『多読ブック』作成の試み」『国際交流基金日本語教育紀要』17、215-226

A Study on Creating Elementary Japanese Reading Materials: Difficulties in Creating Materials that are Conscious of the Connection to the Intermediate Level

SHIMOMURA Ayumi, TANIGUCHI Moeko

This paper examines the difficulties in creating reading tasks for Japanese language learners who have completed the elementary level. First, we refer to the levels of the Japanese Language Proficiency Test, and see length and topics for reading tasks for beginner and intermediate levels. Next, we sort out the difficulties in creating the reading tasks from the perspective of introducing Academic Japanese and using it for examinations. Difficulties are presented from the following perspectives: selection of topics, vocabulary and expressions, and consideration of learners' pre-existing knowledge. In the selection of topics, topics that are familiar to learners are often taken up at the beginner level, and the range of topics is limited. When we are conscious of the bridge to the intermediate level, it is possible to pick up materials from explanations and editorials. In this process, collection and selection of topics is one of the difficulties, and it is necessary to be careful of the vocabulary. We also note that with the vocabulary and expressions for beginner-level materials, it is possible to rewrite the vocabulary and expressions, and consider learners' vocabulary and background. Similarly, from the point of considering the pre-existing knowledge of learners, we discuss points to consider when creating reading materials.